

世界が直面している水の危機 いま私たちは何をなすべきなのか

深刻化する環境問題の中でも特に注視すべき水の危機。

これまで私たちは快適と利便のみを追い求め、すべての源である大いなる水の恵み、かけがえないその大切さを軽視し続けてきたのではないか。

今回の巻頭特集では、それぞれの分野で先進的な活動を展開しておられる方々をお招きして、いま一人ひとりが直ちに取り組むべきテーマを忌憚のない言葉で語っていただいた。



石中 英司氏



本 育生氏



井阪 尚司氏

世界水フォーラム 市民ネットワーク理事	石中 英司氏
環境市民代表	すぎもと 本 育生氏
蒲生野考現倶楽部事務局長	井阪 尚司氏

まず、水フォーラムに期待されること、どのようなかたちで参加されるのかをお聞かせいただけますか。

石中 「第3回世界水フォーラム」があるので立ち上げなければいけないというのは確かにあります。前提には、私たちと水とのかかわりがどんどん疎遠になってきていることがあります。その疎遠になっけてきていることに対して、機会をもっけてもう少し水とのかかわりを見直す場をつくってほしいと…。それには世界水フォーラムというのは良い機会だと思っています。ですから、これが最終目標ではなくて、世界水フォーラム市民ネットワークとしてはこれが一つの最終目標で、終われば解散することになっていきますが、世界水フォーラムを一つの取っかかりとして、今後多くの人に水とのかかわりを持ってほしい。そのためにも世界水フォーラムを有効に活用していったら、誰もに参加しやすい場をつくって提供したり、そのシステムづくりをしたいと考えています。私としてはそういうかたちでお役に立てればと思っています。

本 我々には水というものが必要欠くべからざるものであるにもかかわらず、あまり関心が無い。特に大阪、京都の人々は水に対する意識がきわめて希薄であると思いますね。これは、よく知られた話ですが、大阪、京都の一人あたりの生活用の水の使用量は、水不足などにみまわれることの多い福岡などに比べると圧倒的に多いのです。このことから考え

ても我々はまだまだ琵琶湖に頼って、湯水の如くという言葉通りの生活をしつづけています。実際にこのままずっとやって行けるかどうかというと、非常に怪しげだと思つたのです。そういう意味でこの水フォーラムで誰もがもう少し水に関心を持ち、大切にすれば何か行動を始めるきっかけになつてほしいと思います。ただ意識が希薄なのは市民だけじゃないのではないかと思つたのです。後で申し上げますが我々は全国の自治体の環境コンテストを昨年から始めました。そこで、水に関する質問での回答を見てみると、やはり関西の自治体は認識が低いんですね。特に節水とかの取り組みに関して、他の地域の自治体に比べて、施策がすすんでいない。そこで水フォーラムが、市民とともに施策を実施していくという、自治体に対しての啓発にもならなければならぬと思つています。

井阪 滋賀・京都・大阪で世界水フォーラムが開かれることは、私たち市民側にとつても大きな意味があると思います。昨年、滋賀県で世界湖沼会議が開かれましたが、世界的な会議に市民が参加できたことは、生活者として捉えていた身近な水が世界的な水問題とつながっていることと認識できた点で大きな成果がありました。その延長ともいえる今回の水フォーラムも市民にとつて、水環境問題をよりグローバルな視点から捉えて、課題解決に向けてどのように行動していけばよいのかの方法が共有できるのではないかと思

います。

もう一つ、淀川流域でいうと、上流にある滋賀県と下流の京阪神との人々の交流が今までうまくできていなかったのですが、この会議をきっかけに流域間交流が市民レベルでさらに促進されると期待できます。専門家から市民に新しい水理論の認識の仕方を提示いただき、市民が具体的に行動できるチャンスにしたいと考えています。

危惧すべき「水の自由化」 今後の大きなマイナス要因に

世界の水問題は非常に多岐にわたっており、最終的には国際紛争までいくようですが、現在それぞれのポジションで考えている水問題の中でも緊急の重要課題だとお考えになっていることをお聞かせいただけますか。

石中 環境と水の課題ということになると思いますが、水の問題だけが独立しておかしくなっているのではなくて、環境すべてに渡って、さらに悪くなっているのではないかと実感しています。たとえば、その一つの原因としてマレーシアにある第三世界ネットワークのマーチン・コーという人が文書を出していますが、最大の原因はグローバリゼーションだろうと。この十年間に経済のグローバリゼ



ーションが急速に進んでWTO（世界貿易機関）が凄く力を持ってきて、たとえば多国籍の環境条約などが貿易ルールの下になつてしまった。貿易のほうは優先されるようになり、競争の激化にもなつて環境というのが顧みられなくなっている。それが大きな引き金になっているのだと。私もそれは感じてるところです。今回の水問題に関しても経済のグローバリゼーションの中で水というものを考えたとき、その水環境が非常に悪くなつていきます。特に大きな課題と考えているのは「水の自由化」ということです。日本では馴染みのない言葉ですが、海外では水自身がどんどん自由化されて、たとえば水利権の売買や水道事業の民営化がかなり進行しています。日本でも民営化は部分的には行われているのですが、すべてが民営化されている例はな

く、公営企業が行っており、水を供給する義務・原則があるからすべて民間に委託することはできないという立場をとられているようです。これがアジア・アフリカなどの南の国へ行きますと、ほとんどそういうのが具体的にあっていて、水の自由化と水道事業の民営化がセットで進んでいます。フォーラムの中でも、水

そのものに価値をつけようという発想（フルコストプライシング）が出てきています。今まで水は「ただ」のもののように感じてどんどん使っただけですが、実は「ただ」で得られるものではなく、水を貯めて処理して家庭の蛇口まで運ばれる施設があつてというようにコストが必要なわけで、水は価値のあるものであると。それなら当然その価値に値段をつけましょう。そして公営企業がやっている結局コストを無視した無駄遣いになってしまうので民間企業がきちんとコストを考えながらやりましょうという考え方があり、それで民営化を進めようという例がいくつもあります。

南米のボリビア・コチャバンバの街の水道事業はアメリカ企業の参加もあり、民営化されてしまいました。今までの水道料金ではコストが合わないで値上げすることになり、そうするとすべての人が水道にアクセスできるわけではなく募り、結局暴動にまで発展してしまいました。その結果、政府は水道事業を再び公営化に戻しました。それでアメリカの

企業が撤退したわけですが、ただで撤退したわけではありません。自分たちの事業が順調に展開していけば今後これだけの利益が上がるはずだったが、急にそちらが撤回したから利益が上からなかった、ということでもボリビア政府を訴えています。

水に関する政策を決定する過程に誰が参加しているのが非常に重要になってきます。私たちは世界各地で影響を直接受ける人々ではなく、別の人たちが水の自由化を決めて押し進めていることに非常に大きな危惧を抱いています。日本でも近い将来、そういう問題が起きても不思議ではないと思っています。特に大都会などは民営化しやすい環境になっています。そういう所へはほとんど民間資本が入ってきて水の整備がされ、逆に地方の中小都市などは資本が入らず、水道事業体の赤字がますます膨らみ、運営がさらに行き詰まってしまうことになるのではと危惧しています。ちゃんと水がもらえる所とそうでない所、別の言い方をすれば、お金がある所には水は来るがお金が無い所へは水は来ないというふうなことが水の自由化の結末として出てくるのかなと。非常に危ういと思っています。

本 水問題というのは単独に存在する問題ではない。水問題にはいろいろな環境問題が大きくかかわっている。我々は京都にいますから、やはり「京都議定書」が気になります。実は地球温暖化と水とこのもすごく大きなかわりがある。

でもそれが意外に一般的には意識されていないのではないかと。地球温暖化が進むと世界的な水不足が起こることが科学的にわかっている。簡単に言いますと、「極端化」という言葉を使っていますけど、現在、乾燥気味な地域ではもっと乾燥するであろうと。当然、水不足が起き、それから食糧生産にも大きな打撃ということになります。

一方、現在雨量が多い日本を含むアジアモンスーン地帯は、雨量が増えると予測されています。雨量が増えるのですが実際に使える水は、反対に減少していきます。なぜならば雨の降り方が変わる、つまり、集中豪雨が進むためです。すでに、大阪や東京の気象台の降雨データを見ても昔よりははつきりと集中的になってきています。市民の感覚からいっても、この頃の雨の降り方は昔とだいぶ変わってきたと言つ人が多い。ザーツと降ってサーツとどこかへ行ってしまうことが多いと感じられる。これがもっと激しくなっていくわけです。ですから、洪水などももっと頻繁に起こるようになっていきます。このような状況になっていくと、水不足と洪水が日本でもさらに起こるのではないかと。今も部分的、季節的には起こっていますが、これが慢性的になり得る危険性があることを知らなければ

ならない。これと食糧不足は関連している。地球温暖化による温度の上昇と水不足によって、食糧不足が慢性化していく。日本は食糧の大輸入国でして、世界的な水不足というのは日本の食糧事情にとっては大きなマイナスイメージになるだろうと考えます。このように、地球の温暖化と水のことはまったく別のことではなくて極めて密接な関係だと思つたのです。来年春に京都・滋賀・大阪で「第3回世界水フォーラム」があるというのは、非常に意味のあることだと考えています。これを結びつけて考えて、各々の解決策を一緒に考え、行動、提案していかなければならないと思っています。

井阪 水問題は単に水質だけの問題ではない。温暖化の影響で大量に水が出る所とそうでない所が出てくる問題、それと



関連する農産物への影響。水問題を通して我々の社会のあり方や生活のスタイルを考えていかなければならないと思えます。もう一つは、水の量差の問題です。日本はたくさん雨が降っても砂漠地帯に水を運ぶことはできない。しかし、それに代わる方法で水を供給するにはどうすればよいのかというのを考えることはできる。たとえば、困っているところに

井戸を掘るとか、植林するとか。水を通して私たちは何ができるのかという問題提起や解決に向けてのアイデア等々は出し合えると思うのです。また、水の管理の仕方についても再考が必要だと思えます。人の歴史は水を管理してきた歴史ともいえます。現在では管理し過ぎて、

フアジーな部分も切り捨ててスッキリしてしまっただけ。この五十年間の水管理の広域化が、生活者としての水を疎遠にしました。好例でしょう。五十年前は経済的に大きくなかったかもしれないが、「目の前の水を汚さないでこつ」という気遣いがありました。それが、琵琶湖の水を守っていたともいえます。

滋賀県では特に里山などは長く続いてきたのですが、それがいつ頃から途切れたのでしょうか。

井阪 水道ができる前は、暮らしの中では水を担いで運んでいた。だから水の価値もわかっていた。もつたいないと。今は蛇口を捻れば水がジャーツと出てきま

いる。私たちがやっている水路調査で気づくことは、かつて神様が住んでいるから汚してはいけないと言われていた家の横の溝が、いつの間にか排水路になってしまっていることです。この出来事は、この五十年間のことで、日本だけの問題ではありません。

本 昭和三十年代にエネルギー革命が起きて里山に入る必要がなくなりました。労働は軽減されたけれども、里山との付き合いがなくなりました。これが昭和三十年代です。エネルギー革命が温暖化に結びつき、今おっしゃったように里山と水にも関係しています。

石中 一九六一年頃に材木の輸入の関税がゼロになりました。そこから日本の林業はどんどん変わっていったわけです。井阪 農村へ行きますと、水というのは循環しているものと、特に七十、八十歳代の方たちはちゃんとわかっている。我々が環境で水問題だといった時に、感覚的に言葉、文章ではつながるのですが、感性としてはつながってこない。我々の心の中に自然を感性で捉える眼を取り戻さないといけない。内面をなんとかしないではいけなさと痛切に感じます。

本 昔は水は自治的な地域の一番の共有財産だった。皆でそれを守る管理をしなければいけなかった。まさに自治の象徴みたいなものでした。それがいつの間にか行政などが管理し、他人事のようになってしまうわけです。

井阪 昔は自治区の人が管理して、どう

やって流れていって、どう使われていくのか全部知っておられた。目の前の水が見えていた。それが大きなシステムに変わってしまったと、ここからここまで

は知っているがそこから先は知らないよと、よそことになってしまつたのです。

世界水フォーラムに絡めての個々の活動の具体的な内容などを。

石中 もともと私たちの設立の目的というのは水に関する関心を高め、水フォーラムに市民参加ができるようなシステムをつくることです。そうすることによって本来あるべき多様な議論だとか実践の場を実現する足がかりができるかと考えています。またそれぞれの地域だけでなく、流域全体で水を考えることも必要である。これをわかりやすい具体例でいえば、

一つの河川流域をモデルにして、その流域全体で水問題を考える場をつくっていく。たまたま私たちのメインの場所が京都だったので、桂川を中心に上流と下流の交流事業を京都府との共同事業というかたちで始めて、流域見聞、講座、ワークショップなど多彩な活動を重ねてきました。参加していただいているのは、各



地の地域で活躍されている方やその行政関係の方を含めた方々など、広く呼びかけながら今まで続けてきました。

先月は京都府の京北町でのワークショップを開きました。その後、先々週の土・日も吉町に行きまして、そこでも現地の人と現場を回りながらワークショップを開いて、今後どのようにしていけばよいのかと。特に下流は水を受け取る側で上流は水を渡している側で、お互いによくわからない。それなら、わかるようにもつと交流する機会をつくらなければならぬだろうと。で、まず手始めに限られた流域になります。その中で試してみよう。それがもっと大きくなれば流域全体でそういうことができる。今は桂川流域ですが、とりあえずは交流を継続して、水フォーラムが終わり

てもこのかたちは残しておきたい。そしてそれぞれが毎年どこかでこういう事業をやって、それが大きくなっていけばと願いながら事業を進めています。

本一九九二年に結成しまして、今年でちょうど十年を迎えました。目標は非常に大き過ぎてなかなか叶いそうにないのですが、持続可能で豊かな社会を皆で築くというのが私たちのミッションになっています。何年かかかるかはわかりませんが、解散もできない(笑)。目標があまり大き過ぎますので、現在、具体的な中期目標として三つ掲げています。一つは未来世代に伝えたいという考えから、環境教育に取り組んでいます。日本の中でもっと盛んにしたいのです。我々の分析によりますと、まず環境教育の担い手の不足が圧倒的だからその担い手づくりに貢献しましょうということなんです。二つ目は我々のライフスタイルを変えなければいけないと。ライフスタイルを自ら実践して提案するというようなことをやっています。これはグリーン・コンシューマー活動が中心です。あともう一つが「エコシティをつくらう」です。日本を変えるには地域から変えなければいけないのではと思っています。具体的には環境首都のコンテストを開いたり、各地域の自治体の首長さんに集まってもらって戦略会議を開いたり、たとえばパートナーシップ活動で環境基本計画をつくるお手伝いを地域で行ったり、そんなことをしております。

我々の会は内部に十八ほどの活動グループがあって、その一つに最近つくった「水チーム」というのがあります。これは私たちの理事が水フォーラムがあるからつくろうと呼びかけたものです。今までなかったのがおかしいということではない。具体的に何をやるのかという前にはありますがもっと勉強しなければならぬ状態です。今そこでやるのかなと考えているのは、単に水チームだけではなくて、我々の持っている今までの活動のノウハウだとか実績をうまく活用した方法です。一つは来年の三月に向けて環境教育の、特に水に関する環境教育でもっと総合的なノウハウだとか教材作りなどをやれないかと考えています。ただ三月までには到底できないでしょうから、これは継続的にずっと続けていきたいんですが、三月にはこれの模擬授業みたいなものをぜひ学校等と提携しながらやれたらいいなと思っています。実はいま大阪府からの依頼で府のいくつかの学校で私たちの環境教育を試みているところなんです。実践講座を子どもたち相手にやってほしいと言われまして、具体的に小学生を相手にどうやってらよいかを、今現場に赴いて実際にやらせてもらっているところなんです。

それから、生活を変えるために「買い物から変えよう」というのをずっと提案

しているんですが、その中でも、水というものは昔は買ひ物の対象ではなかったが今ではそうなくなってしまった。こういうことからいったいどんな社会が見えてくるのだということを提案しているところなんです。もう一つは、やはり自治体が水というものに一体どう対応しているのだろうか。これがどうも本当に水というものを我々の生存の基礎なのだとして、だから大切にすることだという考え方の行政になつてないんじゃないかと感じています。水道行政と河川行政があつて、それがばらばらですし、他の部局では水のことも露知らずといったような行政の仕方をしているのではないかと。こういうことに対して、我々は持続可能な地域をつくるために、もっと水というものを総合的に捉える必要があるという提案を、首都コンテストを通じて提案し始めているところなんです。ただ、実際にやり始めてみて、とにかくあまりにもいろいろ局面から見る事ができるので、実に壮大なテーマだなあと実感しているところなんです。

井阪 蒲生野考現倶楽部の「蒲生」は地域名。「考現」というのは現在の姿を見ながら過去・未来を探っていく考現学から出ている言葉です。「倶楽部」というのは、どうせやるんだつたら楽しくやる、面白くないことはしない、そんな発想で生まれました。発端は十三年前です。滋賀県は環境熱心県といわれていて、学校教育に環境教育実践推進校という制度

があります。当時、私が勤務していた学校が三年間この推進校に指定されました。学校というのは研究指定が終わるとまた次の研究が始まります。数年もすると前の実践が形骸化してしまう。地域では、凄く勢いで浸透していった石けん運動が下火になって、スーパーマーケットの店頭には合成洗剤が多く占めてしまっている。これはどうしたものだろうか。どうも我々が学校でやってきたことも石けん運動も、根本的に見直さないとけないのではないかと石けん運動を一生懸命にやっつてこられた方が弾みました。行きあつたのは、継続して自分たちの身近なことを調べていくことが原点ではないかということでした。

蒲生野考現倶楽部の組織の中の一つに環境をマネジメントしようというセクションがあります。設立当初からずっとやってきたのは、人は水とどうかわつてきたのかについて「生活と溝・農業用水」とため池・川と琵琶湖」を調べることで、環境マネジメントに関しては、田んぼが大きく四角に変わる土地改良という農業問題が大きく関係します。数百年から千年、二千年と歴史を持っている農地が激変したのは、昭和の後半。この変化の中で、私たちがやってきた水管理がどういうふうに変つたかを探っています。また、ゼロエミッションというプロジェクトでは、循環を生活システムの中にどう構築するかということを考えています。洗剤のことから言いますと、石け

んや合成洗剤を使ってきましたが、パイオで分解してくれるものはないだろうかとメンバー会議で話題になりました。そこで、去年からパイオの力で分解するよりに考案された洗剤を試験的に試して広げています。

倶楽部のもう一つ大きな事業は、文化を創っていくことと体験的総合学習の推進です。今まで環境問題というのと、とにかく解決することから出発しますが、解決したらそれで終わることが多い。「環境」にかかわるもう一つの方向性は、文化として咀嚼していく姿勢が大切ではないかということになり、イベントや学習会などを行っています。さらに、このセクシオンでは、子どもたちが河原に入らなくなったことに注目しました。ここ三十年ほどのことです。近くにある佐久良川について子どもたちに「あなたは河原で遊んだことがありますか」と調査すると、小学校四年くらいまでは結構行くんですが、六年生くらいになるとちよっと減って、中学校にもなると九〇%が行ったことがないと答えています。学校の横に川があるにもかかわらず行っていない。これは大変なことで、川での経験がないと周りの水を認識することができないことに気がつきました。そこで、昔おじいちゃんおばあちゃんがこんなことをして遊んだよという魚つかみや筏を作って遊ぶ水辺の遊びのイベントをしたりしています。もう一つは、環境文化啓発を行っています。幸いにも講堂が残ってい

る学校があつて、毎年六月にそこでコンサートをしています。去年からランドサットの宇宙映像を駆使して癒し系の歌手を交えて、広い視野から地球の姿から水を捉えてみるコンサートもしています。

その他に、住民参加型の水環境会議なども催しています。これは、日野川の地形・生物・植物・文化歴史・ゴミの五つのテーマで調べる調査研究活動です。また、日野川の水が琵琶湖に入り、その水が淀川に至ることから、淀川水系の上流・中流・下流の人の交流を進めています。昨年は、京阪神の方々に呼びかけて琵琶湖で地引き綱を楽しみました。今年度は、里山がテーマです。京阪神の方、百五十人ほどと滋賀から百五十人の計三百人以上の規模で五月に田植えを行い、八月に水辺の遊びをして、秋には稲刈りを行いました。

また、日野川の水が琵琶湖を介して京都の平安の池とつながっていることから、「蒲生 平安の人水交流」を進めています。平安の池は、水循環に工夫がされています。濾過装置もついていますので、ブラックバスなどが入ってきません。また、周囲には森があります。そこで、鎮守の森の役割も見直してみようということと交流を行っています。それから、倶楽部が事務所に行っている「あたらしや学問所」があります。百三十年ほど前の民家を無償提供していただいているのですが、ここに子どもたちを集めて環境学習をしています。学校では総合学習が始

まっていますが、もっと自由なかたちで学べないかと考えたのが始まりです。また、四月から廃校を利用して、三世代で体験活動を行う「しゃくなげ学校」を開校します。

様々な活動をしています。進めていくときには行政とのパートナーシップを大事にしています。特に、イベント募集の時などは、教育委員会の後押しが必要です。行政と共に行うことが大切ですね。

もっとも大切な少年時代の体験受け継いできたものが消えていく

井阪さんは小学校の先生をしておられますし、本さんも子どもの教育にかかわっておられますが、現代の子どもというのは実感としてどのようにお思いですか。

井阪 地域での子どもたちの様子を例にすれば、地域行事のリーダーをしていた中学生や高校生たちが、いつの間にか受験などで外れていきます。小学生も少子化で減っています。このような状況の中で、昔は先輩から直接教わり、受け継いでいた数々の体験ができなくなってきたいます。これは学校の学習では得られない経験でした。本来、このような学びは、自らが対象とかかわって、体感的にその意味を探るはずのもので、その意味がわからないままに川辺に行っても、川の環境を総合的に捉えることができない。もう一度、学校の教育も含めて、「学び」

について考え直すべき時期がきているように思います。

石中 実は、環境教育を学校や公的機関だけに任せてよいのだろうかと考えています。環境教育は家庭からはじまるものだと思います。先日、川辺に接しようというワークショップに参加したのですが、投げ綱を打っているほぼ同年代の人がいました。彼らは子どもの頃から川辺で遊んでいて、年上の仲間や両親からいろいろと教えてもらっているわけです。ところが、私自身を例に取ってみても、どのように遊べばよいのか、魚を釣るにしても、どのあたりに糸をたればよいのか、わかからない。教えてもらった記憶がない。このような状況だと私の子どももまた何も知らず、自然環境から離れたところで生きていくことになるわけです。これは、親としてよくないことだと実感しています。少なくとも、このようなことは教えていかなければならないのですが、今となっては一緒に学んでいかなければと思っています。

関西圏を視野においた活動についても少しお話いただけますか。

石中 国土交通省の音頭でつくっている淀川水系流域委員会での議論・報告書を見ると、役所が中心ではなくいろいろな方が参加されおり、参考になります。これからは、流域全体の中で水というものをどのように考えていけばよいのか。ダムの問題や都市部での水道問題や農業



用水の課題など個々の問題もそれぞれあります。それらがお互いに関係を持ちながら全体の中でどう捉えていくかということが大切です。そのためにも、各地域で水政策に関して、このようにしていることと決定する場を公開し、誰でもがその場に参加できるようにしなければならぬと思います。行政だけではいけないと考えます。現在、井阪さんが行われている活動のようなどころから、すべてがつながっていくのだと思います。それが、やがて関西全体に細やかに広がっていきばと願っています。それが、私たちの仕事でもあります。

本 関西圏では、特に京都・大阪・滋賀は琵琶湖淀川水系ですが、京都の人

大阪の人はあまり意識してないと思います。私は大阪生まれで京都に住んでいますが、このようなことをしているの、いわば少数派です。周囲の人々と話しているも、琵琶湖をはじめとする水問題を意識している人は少ない。お互いに連携しながら、琵琶湖や流域に対する関心を高めていきたいと思えます。大阪の水はどうなつてしまつたのかと、主体的に考える組織づくりが必要です。基本的枠組みや資金の部分は行政がやらないとダメですが、具体的な部分では民間が動かないとできないのではと感じています。京都に住んでいて京都の水がまずいといわれるのは哀しいですね。

井阪 琵琶湖に行くとも湖をかなり意識できますが、湖から三〇キロほど離れた私が入っている鈴鹿山系の麓では、琵琶湖の水質が悪化しているといつてもあまりにも離れているのもう一つ実感がわかない。しかし、よく考えれば、これだけ山手に住んでいても実は琵琶湖の水を飲んでるんです。田んぼの水も琵琶湖の水なのです。琵琶湖の水がなければ我々の生活もできない。それなのに琵琶湖が汚れていることを他人事のように感じている。この意識の違いは重大ですね。もう一つは、京都は京都、大阪は大阪の認識でなく、この際水系を辿って我々の共通の財産として共有するものをもつて一度見つけ合えないと話が進んでいかない。だから、市民レベルでは「交流」がキーワードとなります。具体的に行ったり来

たりしながら目の前のものを分かち合う。そういう活動をこまめにやらないとだめですね。研究者や行政と市民とが一緒になつて、生活者の視点から「具体的にここをどうしていくか」ということをはじめなければなりません。

先人たちの「暮らしの知恵」をあらためて見直す時が来ている

世界のNGOや市民レベルの活動でもしるいケースや関心をお持ちの部分をお聞かせいただけますか。

石中 フィリピン・マニラの南にカエドの葉っぱみたいな形のラグナ湖という湖があり、そこが日本のODA（政府開発援助）で工業化が進められており、工場排水、家庭排水や湖での魚の養殖で使用される餌の過剰投入などで汚染されています。汚水処理場もほとんどありません。琵琶湖以上に汚染が進んでいます。そこで湖を守るために現地のNGOと連携しながら、何ができるのかを探っていたわけですが、現地で驚いたことがあります。バケツ一杯の水がシャワー代わりで、シャワールームもないので狭いトイレでその少量の水を工夫して使うのですが、これでもなんとかなるわけです。彼らは私たちに「何をしてくれるのか」と期待していますが、実は逆に私たちのほうが学んでいるのです。便利なのは確かにいいけれども、これと引き替えに、私たちは数多くのものを失っていることを実感さ

せられました。

本 インド洋のモルディブでは二十年前はホテルのシャワーも塩水でしたが、利用者も十分満足していました。しかし、最近では高級ホテル化して、すべて温水の淡水シャワーです。その淡水をつくるために島では膨大な石油を使っています。そのようなことが本当に必要なのでしょうか。我々の考える「快適」というものを各地に持ち込むことで、世界を非常におかしくしているのではないかと思えます。これはほんとうに恐ろしいことです。現地の環境大臣と話した時「日本の人々に何か伝えましょうか」とお尋ねすると、優しい表情で「ぜひ皆さんのライフスタイルを変えてください。それでないと、私たちは国土を失ってしまいます」と言われました。

井阪 日本が長い歴史の中で培ってきた「暮らしの中の知恵」をもう一度見つめ直す必要があります。もう一つは、新たな環境社会の枠組みを誰がつくるのかということ。主体者の問題です。これが明確でないと他人まかせになってしまうので、よいアイデアが出てこない。そして、いかにそこへ子どもたちが参画していくかです。この仕掛けも重要です。知恵は、学校ではなく、本来は地域の暮らしから生まれてきたものですから。

この特集は、平成十四年十月に行われた鼎談を収録したものです。

「第3回世界水フォーラム」に向けて

私

私たちの生活になくはならぬ水。滋賀に住む私たちは、琵琶湖やその周りの水を使って毎日生活しています。琵琶湖の水がきれいであれば、人間だけでなく、湖やその周りに棲む生きものまでも日々快適に暮らすことができます。

しかし、その琵琶湖では今、様々な問題が起きています。昔ほどきれいでなくなつたといわれますし、雨が降らない日が続く、そこに棲む生きものに影響を与えたり、下流の京都や大阪などに住む人たちが水を使いにくくなることさえあります。また、外来魚やプレジャーボートなどレジャーにおける琵琶湖の適正利用について新しい問題も起きています。このため滋賀に住む私たちだけでなく、琵琶湖・淀川流域に暮らす人々と一緒に、大切な琵琶湖の水や生きものを守るために日々取り組んでいかなければなりません。

二〇〇一年に開かれた「第9回世界水沼会議」では、琵琶湖を守るための皆さんの取り組みを世界に向けて発信し、また世界の事例を学ぶことができました。

そして二〇〇三年三月、これをさらに広く世界に発信し、またさらに多くの進んだ取り組みを世界から学ぶことのできる会議が、滋賀・京都・大阪を会場に開かれます。これが「第3回世界水フォーラム」です。

世界では、水が汚れたり、水がなくなるなどして、日々の生活に困っている人がたくさんいます。こうしたことが原因で命を落としたり、水をめぐっての国同士の争いさえ起こっています。このような「水」をめぐる問題の解決を図るため、また将来起こらないようにするために、世界中のNPO、住民グループ、研究者、企業、行政関係者などが集まり、それぞれの知恵や経験を持ち寄り議論を深めます。また、「湖沼」「農業」「森林」「下水道」「流域管理」など、水に関するありとあらゆるテーマが話し合われます。

これらの会議の他に、滋賀県では三月十九日から二十一日の三日間、誰もが気軽に水とふれあう楽しいイベント「びわ湖水フェア」を開催します。水にじかにふれて遊ぶことのできる催しや、水をテーマにしたステージショーなどもあつ

て、ご家族そろって楽しくご参加いただけます。また、展示やシンポジウム、そ

のほか会議に参加する国内、海外の人たちの交流活動を通して、皆さんの取り組みを世界に向けて発信することもできます。

ぜひ「第3回世界水フォーラム」にご参加ください。皆さんのご来場を心よりお待ちしております。

第3回世界水フォーラム滋賀県委員会事務局

第3回世界水フォーラム in 滋賀 案内

「フォーラム分科会」(会議)

開催日 3月20日、21日(金・祝)
開催会場 びわ湖ホール、大津プリンスホテル
参加方法 参加登録(有料)が必要です。
登録窓口 第3回世界水フォーラム登録事務局
03(5212)1640

「びわ湖水フェア」

開催日 3月19日～21日(金・祝)
開催会場 県立体育館、ピアザ淡海、なぎさ公園
参加方法 入場無料ですので、お気軽にお立ち寄りください。

アクセス ・JR琵琶湖線「大津駅」または「膳所駅」
・京阪石山坂本線「石場駅」「京阪膳所駅」「錦駅」の各駅
JR大津駅および京阪浜大津駅から有料バス有
問合せ先 第3回世界水フォーラム滋賀県委員会事務局
077(528)3354
URL <http://www.pref.shiga.jp/wwf3/>